

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 29 日現在

機関番号：32636

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16702

研究課題名(和文) マーク・トウェインにおける白人男性感傷研究

研究課題名(英文) A Study on Mark Twain's White Male Sentimentality

研究代表者

生駒 久美 (Ikoma, Kumi)

大東文化大学・文学部・准教授

研究者番号：00715063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではマーク・トウェインの主要作品において、登場人物である白人男性の感傷・共感がどのように機能するかについて、「境界線」をキーワードにしながら考察した。トウェイン小説の登場人物たちは、白人男性としての主体形成をする際、他者に共感することで、自分と他人を分別する境界線を乗り越えたり、引き直したりしている。従来の研究では感傷や共感を女性と結びつける傾向があるが、トウェイン作品において主要白人男性登場人物の主体形成に、人種、ジェンダーや階級上の他者への共感が大きく関わることを指摘し、本研究を遂行した。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated white male sentimentality and sympathy in Mark Twain's major novels by introducing the analytical concept of "boundary." When the white men in his novelistic world seek to construct their subjectivity, I argued, they draw and redraw the boundaries between themselves and the others in race, gender, and class by exercising sympathy toward them. Although the existing studies tend to exclusively associate sentimentality with femininity, I have shown that the white male subjectivity in Twain is constructed through their sympathy for the others.

研究分野：19世紀アメリカ文学

キーワード：マーク・トウェイン 男性性 感傷 白人性 境界線 階級 人種 貧乏白人

1. 研究開始当初の背景

従来、アメリカ文学において「感傷」は、女性と結びつけられて否定的に評価される傾向があった。しかし1970年代から80年代にかけて Ann Douglass と Jane Tompkins の感傷小説の評価を巡る論争以降、感傷および女性性の再評価がされるようになり、それは本研究の主題であるマーク・トウェイン研究にも波及した。たとえば *Sentimental Twain* の著者 Greg Camfield や *Proper Twain* の筆者 Leland Krauth の研究を見れば分かる通り、トウェインの感傷性や女性観が積極的に再評価されるようになった。そうした中、Mary Chapman と Glenn Hendler が編集した *Sentimental Men* というアンソロジーが出版され、それ以来、男性感傷が注目されるようになってきた。しかしその著作のなかにはトウェインに関しては言及がない。さらに白人研究の観点からトウェイン作品における男性感傷を考察した研究は、これまでのところほとんどなされていない。しかしトウェイン作品を紐解くと、主要作品において男性登場人物の主体形成に、他者に対する感傷、共感が大きく関わっていることが分かる。*The Adventures of Tom Sawyer* は、混血のインジャン・ジョーに対する主人公トムの共感が成長の指標となっているし、その続編 *Adventures of Huckleberry Finn* もハックの黒人逃亡奴隷ジムに対する共感が主題となっている。*The Prince and the Pauper* では、エドワード王子と乞食少年トムとの間に芽生える共感の物語である。また *Pudd'nhead Wilson* では、南部貴族に対する主人公のウィルソンへの同情が、黒人乳母のロクサーナの息子に対する共感と対比される形で描かれている。本研究では、トウェイン作品において主人公、もしくは主要登場人物となる白人男性の感傷や共感といった感情が繰り返し主題化されていることに注目し、これまでトウェイン研究の中であまり注目されてこなかった白人男性の感傷や共感がどのような機能を果たすのかという視点から作品分析に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究は、マーク・トウェイン作品において、他者に対する白人男性登場人物の感傷や共感が、登場人物の主体形成にどのような機能を果たすのかを、各テキストに即して考察した。その際、次の二点を目的とした。

- (1) 男性感傷研究だけでなく、白人研究 (Whiteness Studies) にも視野を広げることで、「白人」の中にも地位や身分、階級に応じて分断、断絶があることを考察する。
- (2) 小説の主要男性登場人物が示す共感が、逆説的にも白人および男性の特権性を担保することにつながる場合もあれば、白人男性の共感が、束の間とは言え、人種や階級の断絶を乗り越えられることがあ

ることあることを、作品のコンテクストに応じて検証する。その際、人種、階級、ジェンダーの「境界線」がどのように引かれるのか、もしくは引き直されているのかに注目する。

3. 研究の方法

本研究は主に (i) 資料収集、(ii) 理論的整理、(iii) 作品分析の三点から実施された。

- (i) マーク・トウェインに関する一次、二次資料、および感傷小説、(感傷小説の影響が大きかったと言われる) スレイブ・ナラティブ研究、および白人性研究、男性性研究、ジェンダー研究、人種関係、階級問題に関する文献を収集、分類、整理する。
- (ii) (i) で示した資料を参照しながら、19世紀アメリカにおける「白人性」や「男性性」の概念を整理し、「境界線」という概念を軸に、白人男性の主体形成を体系的に捉えるための理論的基盤を整理、考察する。
- (iii) (i)、(ii) の元、トウェイン作品において白人男性登場人物が人種、階級、ジェンダー上の他者に共感を示す際、自己と他者を分別する境界線がどのように引かれ、引き直され、もしくは境界線が消滅するのかを、各作品のコンテクストに注意を払いながら検討する。

こうした活動を以下の方法論的観点から分析した。

(1) 男性感傷研究

1 で述べたように、従来感傷は女性と結びつけられて論じられることが多く、感傷や共感を含んだ感情は、女性的、個人的な問題と捉えられる傾向があった。しかし、男性の感傷、共感に焦点を当てることによって、感傷や共感が女性に特有な問題ではなく、男女のジェンダー全般に関わり、特に男性主体の他者への関係に関わる政治的な問題であることを検討した。そうしたことを踏まえた上で、男性感傷、共感が、他者を領有する機能を果たすこともあれば、逆に(人種・階級・ジェンダー上の)他者に共感をよせることによって、男性主体の変容の可能性もあることを分析した。

(2) 白人性研究

トウェイン研究は、とりわけ人種(対立、闘争)の視点から活発に行われてきた。しかし「白人」や「黒人」といった人種も決して一枚岩として捉えることができない。実際、トウェイン作品の中には中産階級の白人の他に、貧乏白人、南部貴族、移民の白人等、様々なポジションの白人がひしめいている。白人の同一性や特権性は他人種との差異化・差別化のなかで形成されてきたという認識の

と、白人と非白人の境界に位置する黒人や移民、貧乏白人などの周縁的存在にも焦点を当てた David Roediger の *The Wages of Whiteness* や Matt Wray の *Not Quite White* といった白人性に関する研究書を読むことで、「白人性」も一枚岩ではなく、白人内に身分・階級上の分断があることを考察し、そうした研究をもとに、トウェイン作品を分析することを目指した。

4. 研究成果

(1) 男性感傷研究と白人性研究の接合

Sentimental Men というアンソロジーの出版に示されるように、文学および文化研究の領域で男性感傷が注目されるようになってきた。その一方、白人内に階級上の分断があることを指摘した David Roediger の *The Wages of Whiteness* や Matt Wray の *Not Quite White* を見れば分かるように、白人性研究は主に社会学の領域で活発に行われるようになってきた。本研究は文学・文化研究（男性感傷研究）と社会学（白人性研究）とを接合することで、白人研究と男性性研究あるいは男性感傷研究が不可分であることを示し、白人男性の感傷性を一義的に批判することも称揚することもできず、コンテキストに応じて慎重に意味を検討することを要するものとの認識を押し進めた。

(2) トウェイン作品研究に新たな視点を導入することに貢献

(1) で示した研究をトウェインの作品研究に援用することで、トウェインの白人男性登場人物の示す感傷や共感といった感情の重層性を多角的に検討することに成功した。その際「境界線」という概念をキーワードに用いることで、白人男性が主体形成をする際、他者に共感を寄せることでどのように自己と他者を分別する境界線が引き直されているのか、そうすることでジェンダーや階級、人種の関係性がどのように捉え直されているのか、または分断を深めているのかを詳細に検討することに成功した。作家トウェインの白人としての罪悪感に焦点を当てた研究は存在しても、トウェイン作品における白人男性感傷を多角的に検討した研究はまだ存在せず、トウェイン研究の地平を広げることに貢献した。

(3) 具体的な研究成果

2018 年秋に出版される予定の “Father and Son: The Racial Boundary and the Question of Class in Adventures of *Huckleberry Finn*.” は、元々は米国ミズーリ州で行われたクレメンズ学会出の口頭発表での原稿を加筆・修正したものである。主人公の少年の出自（貧乏白人）に着眼し、人種問題と階級問題の近接性を論じた。具体的には自分の出自の悪さに劣等感を抱いていた主人公が、小説のクライマックスで友人である黒人逃亡

奴隷を救済するか、裏切るかで逡巡する際、それまで彼が執着してきた人種を分断する境界線ではなく、自分とマジョリティを分断する階級の境界線を引き直すことで、友人に共感を示していることに注目し、束の間とは言いえ、人種を超えた友愛を示していることを論証した。

「ロクサーナの逸脱--『阿呆たれウィルソン』における感傷小説とスレイブ・ナラティブのあいだ」は第 21 回日本マーク・トウェインのシンポジウム（「マーク・トウェインと女性」）での発表原稿を加筆・修正したものである。感傷小説、スレイブ・ナラティブという小説の約束事に着眼しながら、女性感傷がトウェインの主要作品においてどのように描かれているのかを考察した。一見すると感傷小説の母親を連想させる混血の母親ロクサーナが、実は感傷小説にも、スレイブ・ナラティブにも収斂できない登場人物であることに注目し、最終的に彼女を、主人公ウィルソンの探偵小説というジャンルに回収していることを批判的に論証した。

これまでの先行研究はトウェインが感傷に肯定的か、否定的か、といった比較的単純な議論を行う傾向があったが、本研究ではそうした研究動向を乗り越え、トウェイン作品における感傷・共感の機能を人種や階級、ジェンダーの観点から多角的に詳らかにした。

また 20 世紀南部女性作家カーソン・マッカーズの『心は孤独な狩人』における主人公の少女ミックと父親の関係性に焦点をあて、ミックのセクシュアリティやジェンダー意識に階級問題がいかに暗い影を落としているかを考察した。この研究は、トウェイン研究とは直接関係がないものの、『ハックルベリー・フィンの冒険』のハックの階級的ポジションや『阿呆たれウィルソン』のロクサーナのセクシュアリティを考察する際に役立つことを付言しておく。

(4) 今後の白人男性感傷研究の展望

本研究を通じて、白人性研究と男性感傷研究を接合することの重要性を証明しただけでなく、白人男性感傷を繰り返し主題にするトウェイン作品研究への適応可能性を証明した。さらにトウェイン作品の白人男性感傷だけでなく、黒人女性感傷をも研究できた点で、本研究が当初想定していたこと以上のことを証明したことを意味するのだが、同時に課題も明らかになった。本研究では主に貧乏白人に焦点を当てることで、「白人」の同一性を切り崩していったのだが、トウェイン作品には白人の移民も登場する。たとえば『阿呆たれウィルソン』のなかではイタリア系移民が登場するのだが、白人男性主人公、あるいは登場人物が白人移民に対してどのような感情を示すのかを考察する必要があることが明らかになった。またトウェインは白人男性感傷だけでなく黒人女性感傷も繰り返し描いているのであり、そうである以上、両者

を比較・検討する必要もある。また研究期間内には検討できなかったが、トウエインの代表作の一つ『アーサー王宮廷のコネチカット・ヤンキー』における主人公ハンク・モーガンの男性感傷がなぜ大量虐殺につながるのかについても考察の余地がある。今後の研究を通じて、ここで挙げた課題にさらに取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

IKOMA, Kumi. "Father and Son: The Racial Boundary and the Question of Class in *Adventures of Huckleberry Finn*." *Mark Twain Studies*. 査読有、Vol.5. Japan Mark Twain Society: 2018. (Forthcoming).

生駒久美「ロクサーナの逸脱--『阿呆たれウィルソン』における感傷小説とスレイブ・ナラティブのあいだ」『マーク・トウエイン：研究と批評』査読無、第 16 号、南雲堂、2017 年。36-45 頁。

生駒久美「娘における父の不在：『心は孤独な狩人』におけるジェンダー・セクシュアリティと階級の交差点」『大東文化大学英米文学論叢』査読無、(47)大東文化大学英文学会、2016 年。11-26 頁。

[学会発表](計 2 件)

生駒久美「ロクサーナ・パニック - *Pudd'nhead Wilson* における感傷小説とスレイブ・ナラティブのあいだ」日本マーク・トウエイン協会、2016 年 11 月 5 日、立教大学(東京都豊島区)。

IKOMA, Kumi. "Was Huck White?: The Racial Boundaries and the Question of Class in *Adventures of Huckleberry Finn*." The Clemens Conference、2015 年 7 月 25 日ラグランジュ大学、(アメリカ合衆国ミズーリ州・ハンニバル)。

[その他]

書評:

生駒久美 R Kent Rasmussen, ed. *Dear Mark Twain: Letters From His Readers*. 『マーク・トウエイン：研究と批評』第 15 号、南雲堂、2016 年。97-99 頁。

学会報告:

生駒久美 第二回 ハニバル・クレメンズ学会報告(全体)『マーク・トウエイン：研究と批評』第 15 号、南雲堂、2016 年。67-69 頁。

生駒久美 第二回 ハニバル・クレメンズ学会報告 学会要旨(個人): Was Huck White?: The Racial Boundaries and the Question of Class in *Adventures of Huckleberry Finn*. 『マーク・トウエイン：研究と批評』第 15 号、南雲堂、2016 年。72-73 頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者 生駒 久美 (IKOMA, Kumi)

大東文化大学・文学部・准教授

研究者番号：00715063